能力も違う。生まれた場所が違えば、考え方も違う。しかし「違う」からこそ、人は交流し新しい可能性を手に入れ、発展してきたのだ。単細胞生物のように皆が同じ遺伝子をもっていたら、環境の変化で人類は絶滅していたはずだ。一人一人の人間は、かけがえのないただ一人の人間なのだ。「差別」はその大切な一人を汚す、許されない行為だ。

　世界の人々がこの考えをもち、目の前にいる一人を心から大切にできるならば必ず「差別」はこの世の中からなくなっていくことだろう。キング牧師は言う。

「人は皆、間違いに気づく本当の自分をもっている。考える頭がある。理解する心がある。行動できる体がある。そして相手を認めることができる」

　私の住む福島は、三年半前の東日本大震災により、変わってしまった。それまでの福島は歴史と自然にあふれた街で、その暮らしがいつまでも続くと誰もが信じて疑わなかった。しかし、震災による津波被害、そして原子力発電所の事故。放射能汚染…。私たちの故郷は大きく変わってしまった。

　私の姉が関西に修学旅行に行ったときのことだ。見学地で一緒になった他県の高校生が姉たちが「福島」県民であることを知ると、そそくさと離れていったそうだ。修学旅行のお土産話を楽しみに待っていた私たち家族は、悲しそうに話す姉の姿を見て憤りを隠せなかった。いったい私たちに何の罪があるのだろうか。やるせない気持ちになった。

　その時、母からこんな話を聞いた。小学校教師である母が児童達と共に、他県に宿泊学習に行ったときのことだ。風評被害や避難者に対する差別のことを聞いていた母も子供たちも、現地の人に避けられるのではないかという不安があったそうだ。特に母は教師という立場から、差別を受けて子どもたちが傷つくことがあってはならないと神経をとがらせていたらしい。しかし何のトラブルもなく最終日を迎え、福島に帰るバスに乗り込もうとしたとき母は驚いた。宿泊していた宿の方々が大きな応援幕を手に、笑顔で見送ってくれていたのだ。幕には被災地を応援する言葉がびっしりと書き込まれ、「がんばれ！福島」と特大の文字が踊っていた。母は不安が吹き飛び、未来への希望が生まれたと話してくれた。

　きっとどこかに風評被害や差別は今もあるだろう。しかしその反対に、私たちのつらさを理解し寄り添ってくれる人も必ずいる。まずは「自分が一人ではない」と考えること。そして「前に進む」こと。傷つくことを恐れずに、未来を信じて、一歩を踏み出す勇気をもつことが大切だ。

　私は友達の笑顔が大好きだ。家族の笑い声が大好きだ。故郷の優しさが大好きだ。だからこそ、私たちを世界の人に知ってほしい。世界のことをもっともっと知りたい。その相互理解、相互尊重の姿勢が真の国際社会の平和につながると考えている。

　私には夢がある。それは、「みんなが平等で平和に暮らすことのできる地球に住む」という夢だ。「世界中の全ての人たちが、互いを認め、笑って肩を組み、支え合うことのできる国際社会を実現させる」という夢だ。この夢を私たちの手できっと叶えてみせる、私はそう考えている。

（原文どおり）